

サタデー コラム

サタデーコラム最終稿執筆に際し、71歳になった今振り返ると、ミツバチと共に歩んだ半生でした。

養蜂問屋秋田屋本店の長男として生まれ、岐阜市本町1丁目のわが家は、家族と、住み込みの社員、転飼養蜂で本場岐阜に立ち寄り宿泊の全国養蜂家諸兄でいっぱいでした。中学2年の時、現在の岐阜駅南口、加納富士町1丁目1番地に本社を移転しました。全国からお越しのお客様に、駅近でと父が懸命に取得した土地でした。父は苦労話はじめ仕事の話をよくしてくれました。今振り返ると、将来への教育だったと思います。長年、住まいと仕事場が同じだったため、幼少期から家業を手伝

秋田屋本店会長 中村源次郎氏



なかむら・げんじろう 1951年、岐阜市生まれ。博士(医学)。岐阜南法人会長。県製菓協会会長。県果樹審議会委員。県収用委員会委員。みつばちの家理事。県養蜂組合連合会長。岐阜市笑いと感動のまちづくり実行委員会会長。市信用保証協会理事。市公共ホール管理財団副理事長。県フエニング協会会長。

ミツバチと共に歩んだ71年

い、親しみ、大学卒業後迷いなく入社しました。

学生時代、夏休みは北海道で養蜂を学び、大学があり、薬のまち道修町がある大阪では商いを学びました。入社後数年は「全ての業務を深く確実に」を目標に日々作業に没頭しました。工場製造、養蜂部で野外作業、総務・会計・営業と現場社員が行う全てを担えるよう心がけました。これは父が尊敬する森永乳業中興の祖と称された大野勇元社長の影響を受けたものでした。氏は卓越した経営者であるとともに全ての分野・業務に才

い、親しみ、大学卒業後迷いなく入社しました。当時森永乳業との取引も増え、小職は目黒にあった中央研究所で検査・分析業務も行いました。

学生時代は文武両道を理想としていましたが、社会人として文理両道の二刀流を志すことになりました。全ての現場業務に携わり、その集大成としての経営を目指しました。

父からは常に「世のため人のため」と叱咤激励されました。父の遺稿の一節に「あの小さな蜜蜂が花に実を結ばせ、蜜を運び、蟬を産し、或いはローヤル

ゼリーを分泌し、花粉荷、プロポリス、蜂針と人々の健康増進に著しく役立ち、その上彼等の集団生活は我々に人生の素晴らしい楽しみを与え、この養蜂こそ無になるもののない有意義な事業と自負して参りました」とあります。このミツバチへの思いを糧として、世界の養蜂事業発展に寄与できれば幸いです。

218年前、1804年に初代が材木商を興し、1887年に6代目が養蜂事業を始めました。小職が9代目中村源次郎を襲名し商いを継承し、昨年11月に会長となり、社長を息子に託しました。サステナビリティ(持続可能性)を使命とし、恒久に社会貢献する企業であり続けたいと思います。